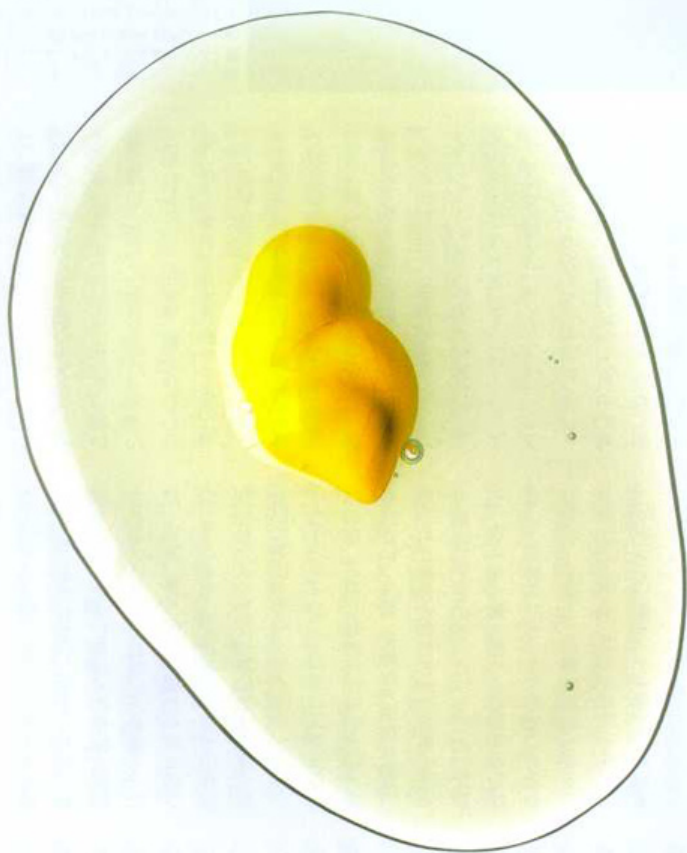


水彩 Technique。

メディウム！



新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店です。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

豊嶋康子

告白と恍惚 エクスタシスと

鷹見明彦 文 森田兼次 写真・印



1990年、軽井沢高輪美術館「ART TODAY '90」展の会場にて。東京芸大4年時に開いた初個展で発表したマークシートの答案用紙による作品と、180mのソロパンが壁に延びる《エンドレス・ソロパン》を出品した



1990

「作品を見せるのは、罪を告白することに似ています」

マークシート 1990
紙、オフセット印刷、
HB鉛筆、机、椅子

暗室になった美術館の公開制作室では、色光に照らされた壁に向かって、黙々とカラー・チャートを描く作業がづづいていた。1秒ごとに切り替わる赤と緑のライトによつて、色分解されて見える色でカラー・チャートをつくり直そうとする行為には、いったいどんな意味があるのか……。

「私の作品の根本には、子どもどころ通っていた教会の日曜学校で聴かされた聖書の言葉『あなたを迫害する者のために祈りなさい』とが、右の頬を打たれたら左の頬も差ししなさい』といった福音書の言葉が影響しています。信仰を持ってはいませんが、その逆説的な反抗ともいつべき認識は、子どもときから日常生活の規範になっていました。」

「小学校の終わりまでは、ヴァイオリンを習わされてきました。上達せずに苦痛でした。いろいろなコンプレックスがありましたね。美術をやりたくなったのは高校に入る直

ジグソーパズル 1994
 ジグソーパズル1函
 上 インスタレーション
 風景 写真提供=ギャラリー
 -360°
 下 ジグソーパズルの函
 とその絵柄



1994

「パズルの絵柄と壁にひろがった線は、
 すべてのピース(部分)を繋いだ全体として、同じものです」

前でしたが、絵は、独りで決断して描けるので、現実逃避を正当化できるような気がしたのです」。

高校に入ると地元埼玉県小川町の絵画教室に通い出した。東京芸大の油画を出た若い先生でした。東京の予備校でも教えた経験がある人でしたが、1枚1枚じっくりと仕上げさせてくれました。高校が好きではなかったこともあり、人嫌いになって、絵なら別な次元に逃げられると思いました」。

1986年、多摩美大の絵画科に入学するが、翌87年東京芸術大学絵画科油画専攻に入り直した。

「実技の授業よりも、三木成夫先生の生物学や解剖学の講義がためになりました。三木先生が、ヤツメウナギの図を均質な筆圧で黒板に描かれるのに感心したり、西江雅之先生の文化人類学では、民族によって色名の数がちがう話などを興味深く聴きました」。

「大学院は、榎倉康二先生の教室に進みましたが、現代美術は、



三二投資 1996 - 株券 個人蔵

独習しました。飯村隆彦さんの映像実験のために」という本で、原稿用紙のマス目をフィルムのコマ数に置き換えた作品の解説を読み、表現する際の方法論を私なりにつかめました。生活のなかで日常やっていることの延長が、表現の素材になるのだと」。

《マークシート》(1990)は、マー



色調補正 2005～ カラーカード、アクリル絵具、RGB調光蛍光灯、色補正フィルター、ビデオカメラ、モニターほか
201色のカラー・チャートを、赤と緑のライトが1秒ごとに交互に照らしつつつける。作家は、それぞれの色光下でチャートと同色に見える色を、色名を隠した絵具を混ぜてつくっていく。モニターの画面には、色補正フィルターを付けた、ビデオカメラを通したカラー・チャートが映されている。写真は、緑のライトの場合(次ページは赤のライト)【*】

2005

「1秒ごとに現れる色が変わるので、常に補正をし続けることになります」

クシート式の答案用紙の回答欄を残して、欄外の余白をすべて塗りつぶした初期作。大学4年の時の初個展に出品した。机と椅子は、大学で処分するものをもらって使いました。同じ年の秋に軽井沢の高輪美術館(現セゾン現代美術館)の企画展に参加することになって、この作品とフレームの両端を外したソロバンが館内に延びて循環する作品を展示しました。

《ジグソーパズル》(1994)は、普通に繋げば決まった絵柄が完成するはずのジグソーパズル一函分のピースを、ランダムに繋いでギャラリーの壁を這い廻らせた作品。

「繋ごうとすれば、別な繋ぎ方もできてしまうのです。あとは天井や床に着いたら折り返すぐらいのルールにして、繋いでいきました。パズルの函の絵柄と壁にひるがった線は、すべてのピース部分をつないだ全体として、同じものです」。

90年代の半ばまでは、先の作品のほかにも、囲碁の名人戦の棋譜

をそのまま使って、すべての碁石を白黒折半の石に改変した《名人戦》や、サイコロ、安全ピン、鉛筆、定規といった日用品の機能やシステムに介入する作品のリストが増えつつあった。

《ミニ投資》(1996)は、証券会社が個人投資家向けに販売した「株式ミニ投資」に投資する作品。「身近な物事を扱う作品に欲求不満を感じるようになって、もっと継続して全体に関わるような事実を作品として扱いたくなりました」。

「そのころ、『水俣・東京展』という展覧会で市民運動の資料展示を見て、一株運動を知りました。一株でも株主になれば、大きな資本の全体の一部として存在します。株式投資のハウツー本で学習して、はじめは、株券や取引報告書などが作品になりましたが、現在は、オンライン・ポートフォリオの有価証券明細表で、自分が投資した銘柄の毎日の変動を公開しています」。

とよしま・やすこ 1967年埼玉県生まれ。91年東京芸術大学美術学部油画専攻卒業。93年同大学院修士課程修了。

主な個展に90年田村画廊(東京)、92,97,2000年秋山画廊(東京)、96,99年ギャラリー360(東京)、97年「クリテリオム25(水戸芸術館、茨城)」、98年ザ・ギャラリー(ガンジー島、イギリス)、99年セゾンアートプログラム・ギャラリー(東京)、00,04年CAS(大阪)、01年クーパ・カルチュア(ミュンスター、ドイツ)、02年 Zlatno Oko(ユーゴスラビア)、96,98,01,03年M画廊(栃木)など。

主なグループ展は、90年「ART TODAY '90」(軽井沢高輪美術館、長野)、94年「ダブル・ブックニング(ギャラリー360、東京)」、96年「インブリケイド・オーダー(ギャラリー美遊、東京)」、97年「私 美術のすすめ(板橋区立美術館、東京)」、「ART TODAY 1997(セゾン現代美術館、長野)」、98年「レファランス(ガレリアラセン、東京)」、2000年「現代美術百貨展(山梨県立美術館)」、01年「2001/ドゥルース(クンストラーハウス・ドルトムント、ドイツ)」、02年「ブラインド・デート(クンストハーレ・プランツ、デンマーク)」、「傾く小屋(東京都現代美術館)」、03年「幻想と幻視(平塚市美術館、神奈川)」、04年「パスワード(CCA現代グラフィックアートセンター、福岡)など。



府中市美術館の公開制作室にて。《色調補正》(2005～)は、同館の公開制作27(企画:神山亮子)で3月12日から4月17日までの間に制作・展示された。今後も別の機会に継続して発表していく予定*]

株の作品の関連では、各銀行に口座を作る《口座開設》、別の銀行の自分の口座に振り込みを重ねていく《振り込み》、生命保険による《生涯設計》などがあり、オブジェをはなれた作品には、成績表や表彰状を公開、複製した作品や問題集を解いて自己採点した作品などもある。

「社会などの全体によつて規定された私、他者によつて表された私を提示することで、自分を含むシステム全体の正体に迫れないかと……」。

《色調補正》(2005)は、通常のカラー・チャート赤と緑のライトで交互に照らして、それぞれの偏光下で見える同色をつくって、チャート脇にならべて塗っていく新作。

「ふだん、私たちが赤や緑と見ている色は、見る側の内部で起こる現象です。ある色を見ると、眼は、パランスをとるのに必要な色を自分の内につくりだします。私たちは反射的に色補正をしています。こ

の作品では、1秒ごとに現れる色が変化して、正確な混色が見極めきれないので、常に補正し続けることになります。」

「ヨハネス・イッテンは『色彩論』のなかで、『補正の法則は、生物界で見られる。動植物は逆境におかれると、機会が与えられれば、そのつど抵抗力のすべてを動員して、高度の活動を行い、自己主張を展開する』と書いています。私が追求する個と全体との関係のコンセプトにも繋がって、尽きない興味がよびまされます。」

記事の撮影のために暗室でストロボを点けようとする時、眼を覆って「私は設定したライトの状態以外では見えないという、作品を見せるのは罪の告白に似ている」とも言う作者の、頑な厳密さに、神に近づくためには悦んで自らを鞭打つたという信仰者の苦行と恍惚が重なる。

4月13日、東京・府中市美術館にて取材

たかみ・あきひ「美術評論家」